【出生前診断された巨大後腹膜腫瘍の1例/大阪母子】

小児における後腹膜奇形腫は、Wilms腫瘍、神経芽腫に

次いで、3番目に多い後腹膜腫瘍ではある

奇形腫の発症は2峰性を示し、第一のピークは生後6ヶ月まで、第二のピークは成人期前半であると報告されており

出生前超音波診断で発見された出生前後腹膜奇形腫の報告はあるものの稀

嚢胞を伴う後腹膜腫瘍は、嚢胞性神経芽腫を含む副腎腫瘍と奇形腫が代表例

Wilms腫瘍や神経芽腫は、腫瘍内部に壊死や出血が原因と考えられる不均一な内部構造が見られる

小児における副腎腫瘍や嚢胞性神経芽腫は稀な疾患である

羊水過多を呈する胎児後腹膜腫瘍は、中胚葉性腎腫瘍(CongenitalMesoblasticNeph-roma:以下CMN)か

胎児の多尿が原因で羊水過多を引き起こす

CMNは嚢胞を伴うこともあり

出生後の画像診断で、腫瘍が腎からの発生の可能性は低い

【巨大後腹膜リンパ管腫の1切除例/御前崎】

全身リンパ管腫は先天的要因での発症が多いため90%以上が2歳までに発見されることが多く、成人での発症は極めて稀て

65%以上が20歳以上で診断される

虫垂粘液囊腫

後腹膜リンパ管腫の発生原因は先天的要因および後天的要因が考えられている

先天的要因ではGodartによる説が一般的であり、胎生期におけるリンパ管流出口の閉塞によりsequestrationが起こることから発生する

後天的要因としては手術や放射線治療などによる炎症、外傷、血栓などによるリンパ管の閉塞か

腹腔内の発生は5%未満で、後腹膜原発は0.25%程度とされている

後腹膜リンパ管腫のほとんどが囊胞状リンパ管腫である

感染や囊胞内出血症をきたすと腹痛が生じこれを主訴とする例もある

CT像はwaterdensityを示すことが多く、被膜は一様に薄く、不整像はなく、周囲との境界は明瞭でありenhancedCTでは被膜や隔壁が造影される

内容液が乳糜の場合はfatdensityを示し、血性の場合はさらにCT値が上がり充実性腫瘍に類似する

【検診にて指摘された無症状巨大後腹膜リンパ管腫の1例/渥美病院】

好発年齢は10歳以下と40歳代の二峰性を呈し、男女比はやや男性に多い

右側左側ほほぼ均等に認め、骨盤内も出現し得る

妊娠を契機に増大したとする報告もあることから

全切除率は6割程度て

リンパ管腫は遺残しても再発しないと

する報告もあるが、再発例が多いとする報告もあり、一定の見解をみていない

完全に切除しても11年後に再発したという報告もある

【周術期管理に難渋した乳児巨大後腹膜奇形腫の1例/東京大】

後腹膜奇形腫は奇形腫群腫瘍中約10%を占めると報

告されている腫瘍で女児にやや多い傾向があり、半数以上が成熟奇形腫であるが、未熟奇形腫、卵黄嚢癌等の症例も存在する